

2012年

A S T 集中講座

福音主義終末論：再考—宇田・エリクソン神学の脈絡において—



主催：～教職のための継続教育～

アドバンスト・スクール・オブ・セオロジー

(Advanced School of Theology)

【日 程】 2012年10月1日（月）～2日（火）

【会 場】 武庫川純福音キリスト教会 （06-6417-6344）

阪神電車・武庫川駅下車、南へ徒歩10分

【参加資格】 牧会伝道に従事している教職・教職夫人、神学生。教会役員あるいは教会スタッフで、所属教会の牧師の承認を得ている方は参加できます（信徒の場合、所属教会の牧師の承諾サインを申込欄をお願いします）。

【受講料】 4講義 5,000円 / 1講義ごと 1,500円

【受講条件】 申込用紙に所定の事項を記入の上、提出してください。

欠席の場合には、事前に連絡をお願いします。

講義の収録は事務局において行いますので、個人的収録はご遠慮下さい。

【申込方法】 申込用紙に1,000円を添えてお申込み下さい。申込金は、受講料に充当いたします。

当日の受付も可能ですが、できるだけ前もってお申込み下さい。

【申込み先】 アドバンスト・スクール・オブ・セオロジー（A. S. T.）事務局

〒643-0032 奈良県橿原市田中町 532 橿原キリスト教会内

TEL&FAX：0744-24-6955 / E-mail: jagkashihara@gmail.com

《信徒リバイバル聖会》

10月1日（月）午後7：30～9：00に、信徒セミナーがあります。詳しくは、別紙にて。

【会場地図】

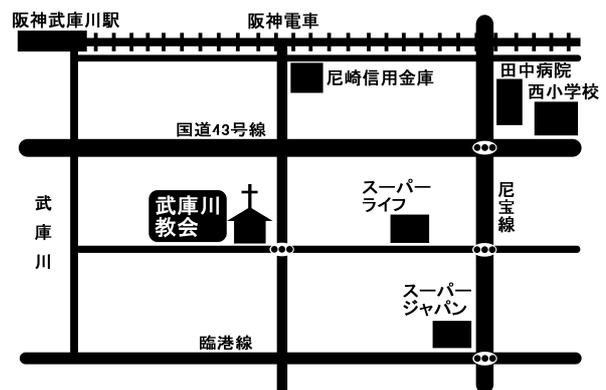
所在地：

〒660-0084 電話 06-6417-6344

尼崎市武庫川町3-32

武庫川純福音キリスト教会

○阪神電車・武庫川駅下車南へ 徒歩約10分



講座のご案内

代表 小泉 智

アドバンスト・スクール・オブ・セオロジーは、1984年の設立以来、教職者に広く継続教育の機会を提供することを目的として、超教派的立場から、毎年講座を企画、開催してまいりました。

本年度は「福音主義終末論：再考—宇田・エリクソン神学の脈絡において—」というテーマのもと、JEC一宮チャペル牧師であり、関西聖書学院講師の安黒務先生を講師にお迎えいたします。東日本大震災の発生によって、終末論への関心もにわか

講師紹介 安黒務先生 (JEC 一宮チャペル牧師)

1954年兵庫県生 大学生の時、JEC 西宮福音教会において信仰を持ち、受洗。
現在 JEC 一宮チャペル牧師、関西聖書学院講師、インターネットによる継続神学教育機関である、「一宮基督教研究所」を主宰。2004年春より、日本福音主義神学会西部部会理事。関西学院大学 経済学部卒 関西聖書学院卒 共立基督教研究所内地留学 東京基督神学校 聴講。著書「J.D.G.ダンの『イエスと御霊』に関する一考察」、「M.J.エリクソンの『キリスト教教理入門』解説ブックレット・シリーズ」など。また、翻訳書としてミラード・J.エリクソン著『キリスト教神学』(第一巻、第二巻)。



講義日時と内容

10月1日	14:30-14:45	開会・オリエンテーション	10月2日	13:00-13:15	開会・オリエンテーション
	14:45-16:15	講義1		13:15-14:45	講義3
	16:30-18:00	講義2		15:00-16:30	講義4
	18:00-18:30	質疑応答・まとめ		16:30-17:00	質疑応答・まとめ

講義1 「近代における終末論」

自由主義神学発生以後、伝統的終末論がどのように変化していくのか。近代の諸見解と代表的人物を紹介し、課題点をあげて考察する。

講義2 「ディスペンセーションリズムの終末論」

いわゆるディスペンセーションリズムの発生を歴史的に位置づけ、その歴史観と独自に体系化された終末論的見解およびその影響を検討する。

講義3 「21世紀の終末論の諸課題1」

旧新約聖書の黙示文学と呼ばれるジャンルの聖書解釈の原則を学び、再臨、空中携挙、最後の審判を巡る諸説を比較検討する。

講義4 「21世紀の終末論の諸課題2」

教会内で特に議論されることの多い千年期と艱難時代にまつわる諸説を取り上げ、英語文献の新しい知見を交えながら理解を深める。

-----キリトリ線-----

申込日 年 月 日

氏名		年齢	
教団・教会名		電話	
住所	〒		
現職名	牧師	伝道師	宣教師 教職夫人 神学生 信徒
参加	全期間参加・部分参加(1234)		
費用	円(全期間前納 5,000円、一回毎 1,500円)		
連絡事項		信徒の場合 牧師の承諾	



2012 信徒セミナー

世の終わりと教会の靈性

おすすめ **アドバンススクール代表 小泉 智**

このたび「福音主義終末論：再考—宇田・エリクソン神学の脈絡において」をテーマとした教職セミナー開催に伴い、安黒務先生を講師にお迎えしての信徒セミナーを企画しました。昨今の日本や世界を取り巻く状況を思うと、クリスチャンは聖書から世の終わりについて深く学ぶ必要を感じます。また、世の終わりに向けて、共同体としての教会の靈性はどうか関わっていくのかを教えてください。ぜひ、ご参加ください。

【日時】 10月1日(月) 19:30~21:00

日本福音教会(JEC)

【講師】 安黒務先生 (一宮チャペル牧師)

1954年兵庫県生。大学生の時、JEC西宮福音教会において信仰を持ち、受洗。現在 JEC 一宮チャペル牧師、関西聖書学院講師、インターネットによる継続神学教育機関である、「一宮基督教研究所」を主宰。2004年春より、日本福音主義神学会西部部会理事。関西学院大学経済学部卒。関西聖書学院卒。共立基督教研究所内地留学。東京基督神学校聴講。著書「J.D.G.ダンの『イエスと御霊』に関する一考察」、「M.J.エリクソンの『キリスト教教理入門』解説ブックレット・シリーズ」など。また、翻訳書としてミラード・J・エリクソン著『キリスト教神学』（第一巻、第二巻）。

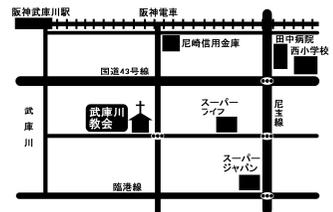


【会場】武庫川純福音キリスト教会

〒660-0084 尼崎市武庫川町3-32 電話 06-6417-6344

○阪神電車・武庫川駅下車南へ 徒歩約10分

※駐車場には限りがあります。車でお越しの際は、
近隣の有料駐車場をご利用下さい。



【献金】席上献金があります

【主催】アドバンス・スクール・オブ・セオロジー

[事務局]〒634-0032 橿原市田中町 532

橿原キリスト教会内 Tel&Fax 0744-24-6955

- 1 **福音主義終末論:再考**
 ー宇田・エリクソン神学の脈絡においてー
 〒671-4135 兵庫県宍粟市一宮町安黒332
 一宮基督教研究所
 安黒 務
<http://www.aguro.jp>
 aguro@mth.biglobe.ne.jp
- 2 **Advanced School of Theology 集中講座**
『福音主義終末論:再考』
講義① 近代における終末論
 課題:自由主義神学発生以後、伝統的終末論がどのように変化していったのか。近代の諸見解と代表的人物と立場を紹介し、課題点をあげて考察する。
- 3 **リベラル神学における終末論と**
「福音主義終末論:再考」の関係
 ○リベラルな神学の神学的洞察の位置づけ
 - ファン・ルーラーは、敬虔主義後に啓蒙主義が起こったが、宗教改革と啓蒙主義とは果たして対立を意味するだけなのか。これらのことは、近代人の真の霊的ニーズなのであり、単に「キリスト教信仰の喪失」を語るだけでは終わらないのではないか。むしろ、十分に展開された三位一体論が、すなわち聖霊論の展開が必要とされているのではないか。」と問う。
 - 歴史的な福音主義キリスト教の視点を尊重する立場から
 - 1.近代と現代の終末論に関するマクロな輪郭に関する情報
 - 2.近代と現代の終末論に関する注目すべきエッセンスの指摘
 - 3.福音主義諸教会の核を成す終末論信念体系の確認と、近代と現代の終末論の洞察をも加味したかたちでの、それに関するより一層の掘り下げと一つの材料の模索
- 4 **1.「伝統的終末論」の歴史的経緯**
 1. 序:教理史における伝統的終末論の未成熟
 - 1.使徒時代から五世紀初頭まで
 - 2.五世紀初頭から宗教改革まで
 - 3.宗教改革から十九世紀まで
 - 2.啓蒙思潮と近代・現代のリベラリズム:豊かな福音主義的終末論再考のための諸洞察
 - 1.近代化された終末論(ー1880):カント哲学
 - 2.古代化された終末論(1880ー1920):黙示文学・批評的研究
 - 3.実存化された終末論(1920ー1960):キルケゴール・ハイデガー哲学
 - 4.世界化・歴史化された終末論(1960ー):プロッホ・ヘーゲル哲学
 - 3.追記:リベラルな神学の終末論研究の洞察を視野にいれたかたちでの福音主義的終末論:再考への礎石
 - 1.基本的視点に関する三項
 - 2.聖書の終末論のパースペクティブ
 - 3.開始された終末論
- 5 **2.近代の諸見解と代表的人物**
 - ①近代化された終末論:脱終末論化
 ー豊かな福音主義的終末論再考のための諸洞察としてー
 - 1 カントとリッチル
 - 2 ●カント(1724-1804)
 - 『単なる理性の限界内の宗教』『万物の終り』
 - 黙示録的終末論を否定し、終末論を倫理的に解釈

- リッチル(1822-1889)
 - 『義認と和解』
 - 「神の国」をカント的倫理的に解釈し「非終末論的神学」を構築
- 3 特色と課題点の考察
- 4 ○啓蒙思想の影響
 - 脱終末論的傾向
 - 分析・評価
 1. ヨハネ黙示録[黙示文学]的終末論の否定
 2. 終末論の倫理的解釈[終末論の倫理的還元]
- 6 ■ カントの黙示録的終末論の批判
 1. カント『万物の終り』1974
 2. ヨハネ黙示録の「文字通り」の解釈を批判し、「道徳的」に解釈されるべき
 3. ヨハネ黙示録－実践的に有意義なものの「比喩的」な説明
 4. 時空を超えた別種の次元－道徳的次元に移行
 5. 終末論の倫理化－倫理的終末論
 6. 倫理を最高善へと無限に引き上げ－「万物の究極的目的」
 7. 終末論は「幻想的」思弁→人間の「最高善」を目指す謙虚な努力として再生
 8. 終末論は、「歴史」の事柄ではなく、「倫理」の事柄
 9. まとめ: ①ヨハネ黙示録[黙示文学]的終末論の否定、②終末論の倫理的解釈
- 7 ■ リッチルの「神の国」の理念
 1. カントは1804年に死んだ。カントの思想がプロテスタント神学に流入するのは、アルブレヒト・リッチル(1822-89)においてである。
 2. カントとリッチルの関係－終末論の「倫理化」
 3. 終末論的概念－「神の国」をカント的な仕方です「倫理化」
 4. 「神の国」の神学者－楕円的構造－社会問題と倫理問題を二つの中心に
 5. 「神の国」をカント的倫理的に解釈－完全に非終末論的神学を構築
 6. 神の国－神が人間に実現したもう最高善－地上に神の国を実現
 7. リッチルの「神の国」の社会的性格→弟子たち「内面化」「精神化」－そのヴイルヘルム・ヘルマンはバルトとブルトマンの師
 8. バルトとブルトマンにおける「世界の喪失」の系
- 8 ■ 2.近代の諸見解と代表的人物
 - ②古代化された終末論: 黙示文学的
 - －豊かな福音主義的終末論再考のための諸洞察として－
 - 1 ヴァイスとシュヴァイツァー
 - 2 ○ヴァイス(1863-1914)
 - 『イエスの神の国の説教』
 - イエスの説教は「ユダヤ教的黙示文学」の終末論に規定
 - シュヴァイツァー(1875-1965)
 - 『メシアの秘密と受難の秘密』
 - 終末論者イエスは、自らの命を犠牲に、神の国の到来を強いた
 - 3 特色と課題点の考察
 - 4 ○聖書学の領域からの影響
 - 聖書を時代史的背景において実証的に解釈する宗教史学派
 - 分析と評価
 1. 永遠の真理の座から引きおろし、古代思想へと還元
 2. 終末論を再発見したものの、それを現代思想の有意義なものとしては確立しなかった

9 ■ 宗教史学派による終末論の発見

1. 宗教史学派(1880-1920)ー聖書学者の集団
2. リッチルに代表されるキリスト教の近代的哲学的解釈に反対し、聖書やキリスト教をその発生の場である宗教史的背景において解釈し、実証的歴史研究を推進
3. 宗教文書をその発生する歴史的基盤において一文書を産出する宗教団体が実際に経験する諸発展や諸関係の中でそれらを解釈
4. カント的な理論理性と実践理性の二元論で見失われていた「歴史」の次元ーヘーゲルの「歴史哲学」や進化の思想が採用

10 ■ ヨハネス・ヴァイスの終末論の「発見」

1. 批評的神学における終末論的傾向の創始者のひとり
2. ヴァイスは、1892年「イエスの神の国の説教」出版ー近代における終末論の発見ーエポック・メイキング [画期的、新しい時代を開いた]な出来事
3. 宗教史学派の方法に従い、イエスの説教を宗教史的に究明ー「神の国」の概念ーユダヤ黙示文学の終末論によって規定
4. リッチルの神学の本質的支柱を除去ーリッチルの本来の根はカントや啓蒙主義の中にあると批判
5. イエスの「神の国」の概念ー倫理的な目的概念ではなく、ユダヤ教的黙示文学的なもの=奇跡的に介入する出来事
6. 古代思想と近代思想の区別ー古代思想を古代の内実において明らかにー時代史的に制約された過去の世界観ー教義学的に無価値

11 ■ アルバート・シュヴァイツァーの徹底的終末論

1. シュヴァイツァーは、1901年『メシアの秘密と受難の秘密ーイエス伝素描』出版
2. ①ヴァイスの終末論の立場を貫徹した。②ヴァイスーイエスの説教に終末論を発見、シュヴァイツァーーイエスの生涯へと徹底させて解釈
3. 終末論の歴史的研究ーリッチル的な近代的色眼鏡なしに、過去のを過去のものとして認識する態度
4. イエスーその時代の終末論的思想にまったく捉えられた人間
5. 「ところが神はこの[終末の到来のために不可欠な]迫害を起こさないのである。それにもかかわらず贖いはしなければならぬ。そこでイエスの頭に、将来の人の子としての彼が、贖いを自ら実現せねばならぬという考えが浮かんだのである。」
6. メシアの秘密: イエスが神の国の到来は間近と宣教。人の子の天からの来臨による。「イエスが町々を回り終わらないうちに、人の子は来る」マタイ10:23。ダニエル書の黙示文学的な超自然的メシアの到来。その人の子が実は「ナザレのイエス」。
7. 受難の秘密: ところが、その神の国はなかなか到来しない。①バプテスマのヨハネの死ー陣痛。②神の国を到来を、イエスは自分の死をもって強いられた。
8. イエスの死により、終末論は破産しそれから解放されるー倫理的意志としての「生への畏敬の倫理」

12 ■ カントからシュヴァイツァー 終末論の変遷と意義

1. 終末論の変遷
 1. カント: ヨハネ黙示録(黙示文学)を倫理化し、黙示文学を否認した。
 2. リッチル: カントの方向を継承発展させ、非終末論的・倫理的な神の国の神学をつくりあげた。
 3. ヴァイス: 純粋に歴史研究の立場から再び黙示文学的の神の国を回復した。
 4. シュヴァイツァー: ヴァイスを受け継ぎ、それを止揚しーカントとリッチルとはちがった含蓄においてであるがー倫理的終末論の立場に立つに至った。
2. 意義
 1. 思慮ある近代人ーそのような終末論的人生観を受け入れえない
 2. 新しい聖書神学の道を指すのではなく、自由主義神学の破壊に終わった
 3. ヴァイスやシュヴァイツァーは終末論を再発見したが、現代の思想に有意義なものとしては確立しな

かった

4.20世紀における終末論の現代的思想的意義を確立したのは弁証法的神学において

13 ■ 2.近代の諸見解と代表的人物

③実存化された終末論:実存感覚

—豊かな福音主義的終末論再考のための諸洞察として—

1 バルトとブルトマン

2 ●バルト(1886-1968)

●『ローマ書』第二版

●終末は、未来の事件ではなく、永遠と時間の「接点」に起こる

●ブルトマン(1884-1976)

●『歴史と終末論』

●終末は、世界史の未来にではなく、実存の決断的現在に起こる

3 特色と課題点の考察

4 ●二つの大戦の影響

●終末論のユニークな再解釈は、神学的に独特の意味が付与され、終末論は現代の信仰の論理と化する

●終末論は、古代思想ではなく、現代的思惟となる

●分析と評価

1. 実存論的出来事化

2. 超越論的気化現象

3. 実存的内面的な意味と慰めの孤島と化した

14 ■ 弁証法神学における神学的終末論

1. 1920年代-20世紀の終末論研究史における一大転回

2. 弁証法神学による終末論のユニークな解釈—神学的に独特の意味が付与されて、終末論は現代の信仰の論理(正しい判断や認識を得るための物の考え方、前提とそれから導き出される結論との間の筋道)と化する

3. 終末論—古代思想ではなく、現代的思惟(宗教・哲学などの根本問題について深く考えること)となる

15 ■ バルトの質的弁証法的終末論 A

1. 弁証法神学は、バルトの『ローマ書』第二版、1919年で出発

2. 第一次世界大戦戦後派の神学—文化の審判—近代文明の楽観主義的な進化発展の歴史の終末を意味するような断絶—近代歴史意識の破滅—「非歴史時代」の開始

3. バルト—終末論の位置—研究対象から「思惟様式」へと転移

4. バルトの終末論—キルケゴールによって本質的に規定「もしわたしが『方式』なるものをもっているとすれば、それはキルケゴールのいわゆる時間と永遠との『無限の質的差別』なるものの否定的および肯定的意味をあくまでで固守した、ということである。『神は天にいまし、汝は地にあり』。私にとっては、この神とこの人間との関係が聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である。哲学者たちは人間の認識を脅かすこの危機を根源と呼ぶ。聖書はこの十字路にイエス・キリストを見る。」

5. 時間と永遠の恒久的危機—バルトのローマ書—組織的な研究—神学的釈義—この組織的思惟の性格=バルトのいう終末論=バルトの思惟方式、すなわち終末論=「永遠と時間の質的差別」の論理

6. 典型的用法—ローマ13:11以下、「眠りからさめるべき時期」の解釈—「永遠の瞬間はすべての瞬間に對立して立っている」

7. 時間に対してはまったく異質な永遠に関わるとは、「眠りから醒める」ことに似た質的転換—「覚醒」の瞬間—牢獄的時間性は破れ目をもつ

16 ■ バルトの質的弁証法的終末論 B

1. 終末とは、未来の事件ではなく、永遠と時間の接点[=現在]

2. 覚醒の瞬間＝眠りの時間が消滅してしまうー全然異質なモノ
3. しかし、この覚醒の瞬間ー時間の中に生起する、生起するのであって眠りの時間の中のどこにもない、接点のみがあるー数学的・垂直に交叉する点
4. 再臨が遅延するーその概念からいって、少しも『現れる』はずのないものが、どうして遅延するわけがあるのか。ーそれは時間的な出来事ではない。
5. 永遠の瞬間ー覚醒のみによって捉えられる瞬間ー黙示文学的終末論は組織的に否認
6. 新しい終末論理解ー独自の仕方でも新しい終末論の次元に翻訳
7. 再臨が遅延しているのではなく、我々の覚醒が遅延しているー再臨を覚醒という仕方でも待つ
8. 黙示文学的歴史の水平次元における終末論→永遠と時間の質的弁証法という垂直次元に移し変えられた。

17 ■ **ブルトマンの実存論的終末論 A**

1. 終末論的なものーブルトマン神学の中心的な位置、神学全体の構成原理
2. 宗教史学派とのつながり、弁証法神学との接触
3. 原始キリスト教の終末論的特徴を純粹に歴史的に確認するのみならず、『終末論的に実存すること』として理解ー現実的妥当性まで高める
4. 新約聖書の歴史的研究者ー弁証法神学的終末論との結びつく媒体＝ハイデガーの哲学
5. 「審判」ー黙示文学的未来の事件ではなくーキリストを信じるか、信じないかという現在の判断の事柄「信じないものは、すでにさばかれている」ヨハネ3:18b
6. 「現在」ーこの世が終わる、この世の支配が終わるといふ終末、黙示文学的な未来における世界の破滅ではなく、現在におけるこの世の終末
7. 「現在におけるこの世の終末」ーブルトマンのハイデガー哲学の援用
8. ヨハネ伝の「世(コスモス)」ー森羅万象全体を意味する「宇宙」ではなく、人間の実存様式ーしかも信仰以前の古い実存様式
9. このコスモス的な実存様式を克服し、新しい実存(信仰的な実存)へと転回するときー「世界」は終わるー「この世」の終末が起こるー「非世界化」の思想

18 ■ **ブルトマンの実存論的終末論 B**

1. ヨハネにおける現在終末論の発見ー古い実存様式としての「世界」が否定ー「非世界化」の論理
2. 終末論的な出来事ー黙示文学的な世界破滅の宇宙ドラマとしてではなく、むしろキリストにあって新しく生きるという実存的転換として実存的に理解
3. 終末ー「世界史」の未来に起るのではなく、「実存」の決断的状况に起る
4. 「世界史」を否定し、「実存の歴史性」をとるー動物が自然に規定されて生存するのはちがって、出会いや決断を通して自己の真の本質を獲得していく
5. 典型的な実存主義ー人間の真の自己ー前方にあるーそれを決断によって選び取っていかねばならないー決断を通して己れの本質を獲得するーそしてこれは神の恩寵によってもたらされる
6. 終末論的な瞬間である可能性ーあらゆる瞬間の中に眠っているーそれを目ざまさなければならぬ

19 ■ **2. 近代の諸見解と代表的人物**

④ 世界化・歴史化された終末論: 未来感覚

ー豊かな福音主義的終末論再考のための諸洞察としてー

1. モルトマンとパネンベルク
2. ●モルトマン(1926-)
 - 『希望の神学』
 - カント主義の影響による世界喪失を克服して、神学における世界の回復を追及
- パネンベルク(1928-)
 - 『歴史としての啓示』
 - 歴史的世界を啓示の舞台であると主張しつつ、神学における歴史の回復を追及
3. 特色と課題点の考察
4. ●カント的な基調により欠落していた「世界」また「歴史」の次元の回復

○分析と評価

1. カント主義→キルケゴールの実存主義→ヘーゲルの普遍的・歴史的見方へ
2. 近代認識論における強調の問題、二極の間を往来する振り子の運動における傾き[スウィング]の問題

20 ■ 1960年代の状況

1. 1960年以降、終末論研究はさらに大きく転回
2. 1960年代初頭の「黙示文学」の復権
3. 1950年代ヨーロッパの神学界を支配したブルトマン学派の内部解体
4. これと並行した登場－パネンベルク派－1961年『歴史としての啓示』出版－特にパネンベルクは、黙示文学を基礎として壮大な歴史神学を構想
5. 1964年、ユルゲン・モルトマン『希望の神学』－バルトやブルトマンの終末論のカント的基調を批判－欠落していた「希望」の次元の回復
6. 現在終末論ではなく、将来終末論が新しく主張
7. 20世紀における終末論－発想の起点－最初は「過去」から、次の弁証法神学では「現在」において、そして60年代は「将来」からと、180度転回した。

21 ■ 3.リベラルな神学の終末論研究の洞察を視野にいれたかたちでの福音主義的終末論:再考への礎石

①基本的視点に関する三項

1. キリスト教信仰の正しい理解は、必然的に希望論へ向かわざるを得ない。
2. 聖書の終末論は、ただ単に未来の事柄を扱うのではなく、われわれの信仰的実存の「真ただ中」という現在の次元、われわれの「前に」という未来的な次元、そしてわれわれの上という超越的・彼岸的な次元をその視界に包摂するものである。
3. キリスト教終末論の正しい理解は、すでに「実現された」面、より正しくは「開始された終末論」と、「未来終末論」の両面を密接に関連づけながら考察するときに、初めて可能となる。

22 ■ 3.リベラルな神学の終末論研究の洞察を視野にいれたかたちでの福音主義的終末論:再考への礎石

②聖書的終末論のパースペクティブ

- 1 旧約聖書のパースペクティブ
 1. 約束の神
 2. 来たりたもう神、神の訪れ
 3. 全地の王
 4. 契約の思想
 5. イスラエルの解放と回復の日の預言
 6. 神の霊が再び注がれる未来の日
 7. 主の日
 8. 新しい至福の時代の到来
- 3 新約聖書のパースペクティブ
 - 4 1. 旧約の約束されたメシヤの到来
 2. 来るべき時代は開始された
 3. 二段階のメシヤの来臨
 4. 二つの時代－DデイとVデイ

23 ■ 3.リベラルな神学の終末論研究の洞察を視野にいれたかたちでの福音主義的終末論:再考への礎石

③開始された終末論

- 1 1. 終末論と歴史
 1. 歴史は重視されている
 2. 歴史は神の目的と計画の展開過程である
 3. 歴史は全体として、統一あるものである
 4. 神は歴史の主である

- 5.キリストは歴史の決定的中心である
- 6.すでに「終わりの時」が始まっている
- 7.「終りの時」の完成はなお未来である

2. 終末論と神の国

1. 神の国は使信の中心的な位置
2. 基本的な意味は、神の支配
3. すでに実現されつつある現在面と未成就の未来面の二面性
4. 全世界の再創造・万物の更新が含まれている

3. 終末論と聖霊

1. 終わりの時の幕開けの道備え
2. メシヤに必要な賜物を賦与
3. 物質・倫理の両面でイスラエルを未来において刷新する源
4. 悪霊の追放
5. 信者が受けている聖霊とそのすべての賜物は、来るべき祝福の「初穂」・御国の前味・終末の「初めの実」

24 ■ さらなる神学的思索のための 文献紹介、そしてICI資料

- H.G.ペールマン著『現代教義学総説』
- 宇田進著『総説現代福音主義神学』
- 大木英夫著『終末論』
- 春名純人著『哲学と神学』
- エリクソン著『キリスト教神学』
- TH.C.フリーゼン著『旧約聖書神学概説』
- 牧田吉和『ファンルーラーにおける三位一体論的・終末論的神の国神学と聖霊論』
- 2006/10/16: 関西聖書学院: 関西聖書学院講義: 安黒: 「福音主義神学B」講義録: DVD[4枚]+資料=10000円
- 2006/4-2009/1: 生駒聖書学院: 生駒聖書学院講義: 安黒: 福音主義神学A: 講義録: DVD[770分]+資料= 定価 12800円
- 2006/06/21: 関西学院大学神学部: 関西学院神学部講義: 「現代神学」: 安黒: 「現代における福音派の神学」: DVD[1枚]+資料=1880円

1 ■ Advanced School of Theology 集中講座

『福音主義終末論:再考』

講義② ディスペンセーションナリズムの終末論

課題:いわゆるディスペンセーションナリズムの発生を歴史的に位置づけ、その歴史観と独自に体系化された終末論の見解およびその影響を検討する。

2 ■ 講義概略

1. 序:全体の眺望—起源・背景・経緯
2. ディスペンセーション主義の聖書解釈法の問題
3. ディスペンセーション主義の「教会論」への影響
4. ディスペンセーション主義の「終末論」への影響
5. 結び:ディスペンセーション主義に対する評価
6. 補論:神学的イスラエル論問題:オランダ神学

3 ■ 序

1. ディスペンセーション主義の「福音主義的終末論」への貢献
 1. 終末論の重要性の強調—進歩主義的歴史観VS再臨の教理
 2. 現代神学と同時進行的に発展—地上に定住VS寄留の民
 3. 神の国についての概念—倫理的な交わりVS歴史の完成への待望
2. D主義に関する学識の新時代の到来
 1. 最も重要な案内書
 2. D主義の種々の発展におけるダービーの位置づけ
 3. バスの公平かつ客観的で、論争的でない手法

4 ■ ディスペンセーション主義と福音主義の「聖書解釈」:比較対照表

- 1 ディスペンセーション主義
- 2
 1. ディスペンセーションの本質と目的
 2. 聖書の(極端な)字義的解釈
 3. イスラエルと教会の二分法
 4. 教会についての制限された見方
 5. 王国のユダヤ的概念
 6. 延期された王国
 7. 人間に対する神の取り扱いを生み出す律法と恵みの区別
 8. 聖書を区分すること
 9. 患難前携挙説
 10. 大患難の目的
 11. キリストの千年王国支配の性質
 12. 字義的な「永遠の状態」理解
 13. キリスト教界の背教的性質—地上の見える教会と見えない天的教会
- 3 福音主義
- 4
 1. 使徒は旧約と新約は有機的—体理解
 2. 使徒の聖書解釈の原則のバランス
 3. 使徒は霊的・有機的に一体と理解
 4. 使徒は旧約と新約の霊的連続性理解
 5. 使徒は神の国を普遍的に理解
 6. 使徒には延期という考え方はない
 7. 使徒には、人間に対する神の取り扱いに差別はない

8. 使徒は聖書を有機的一体的に理解
9. 使徒は患難後携挙説理解
10. 使徒は教会が患難期を通ると理解
11. ユダヤ的ではなく、普遍的
12. 象徴的描写と理解
13. 見える教会と見えない教会の理解

5 ■ **デイスンペーション主義と福音主義の「教会論」対照表**

- 1 **デイスンペーション主義**
 - 2 1. イスラエルと教会の関係
 2. イスラエルがイエスの提示された神の国を拒否したため、臨時に、一時的に異邦人に提供
 3. 見える地上の教会の腐敗、分離の傾向
 4. 教会は天的、患難前に携挙
 5. 大患難の預言は、イスラエルに
 6. イスラエルに対する旧約の預言は、千年王国時代にすべて成就する
 7. 神の国(普遍的)と天の御国(ユダヤ的)の相違
- 3 **福音主義**
 - 4 1. 旧新約の神の民の一体性
 2. 旧約と新約の霊の神の民は有機的に一体である
 3. 見える教会と見えない教会のバランスのとれた考え方、秩序とカリスマの両面
 4. 教会は、地上で患難・保護・証し・殉教
 5. 大患難の只中で教会は守られる
 6. 神の民は有機的に一体、旧約預言は千年王国・新天新地に重ねて言及
 7. 神の国は、「神の支配」であり、教会はその表れ

6 ■ **デイスンペーション主義と福音主義の「終末論」対照表**

- 1 **デイスンペーション主義**
 - 2 1. 教会は秘密の空中再臨のときに、携挙される
 2. 地上に残された神の民はイスラエル民族であり、大患難を通る
 3. イスラエルと教会は別個のものである
 4. イスラエルが国家として特別な身分に再び置かれる
 5. 旧約の預言はどれも教会に関係せず、教会において成就していない
 6. 千年王国は、ユダヤ的な王国である。
 7. 空中再臨と地上再臨のふたつの再臨
 8. 実際のダビデ王国が再建され、旧約の犠牲までも復活する。
- 3 **福音主義**
 - 4 1. 教会は大患難の只中で保護され、証しし、殉教をも恐れない
 2. 民族としてのイスラエルの中にも、大患難の中でリバイバル
 3. 救われたユダヤ人は教会に統合
 4. 民族としてのイスラエルへの特別な言及は新約にはあまりない
 5. 使徒たちは、旧約用語を使用して「新約の教会」を説明
 6. 千年王国は、ユダヤ的な王国ではなく、救われたユダヤ人と異邦人による普遍的な王国
 7. 再臨はひとつであり、空中再臨・携挙・地上再臨は一体の流れの中にある
 8. 新約で、千年王国に対する言及はきわめて少ないので、空想してはいけない

7 ■ **ディスペンセーション主義に対する評価**

1. C. B. バスの評価
 1. 18世紀間にわたり歴史的千年王国前再臨説
 2. キリストの再臨一人格的・文字通り・見えるかたちで地上に
 3. 誤った聖書解釈の問題
2. W. グルーデムの評価
 1. 古典的→改訂→プログレッシブへの変化
 2. 多くの点で共通理解
 3. しかし旧約預言成就理解についての相違
2. J.A. デリアの評価
 1. プログレッシブは、ラッドの立場にますます接近
 2. 2000年にダラス神学校は、1955年にラッドがいた場所に追いついた
4. V.S. ポイスレスの評価
 1. 前置きのなかたちで教会時代に、最終的なかたちで千年王国時代に一民族的イスラエルの上への旧約預言の成就
 2. 主義の幾つかの主要な教えを乗り越える試み、調和的な論調への評価
 3. しかし、ほぼ確実に、ラッドのパターンを後追い一契約的プレミレニアリズムに導く

8 ■ **さらなる神学的思索のための****文献紹介: 改革派系、他**

- 近藤勝彦著『現代神学との対話』ヨルダン社、「現代神学におけるイスラエル論」
- 改革派神学12号1976、橋本龍三論文「イスラエル問題の神学的考察」
- Hendrikus Berkhof “Christian Faith” pp221-265, 'Israel'
- Hendrikus Berkhof “Christ as the Meaning of History”
- ハンス・キュンケ『教会』上巻・下巻
- 改革派の終末論－改革派教会世界会議終末論研究委員会報告－
- A.ファン・リューラー『キリスト教会と旧約聖書』
- G.E.Gunn & C.I.Crenshaw “” Dispensationalism — Today Yesterday and Tomorrow—
- David E.Holwerda “Jesus & Israel — One Covenant or Two?—”
- Oswald T.Allis “Prophecy and the Church”
- C.Vaderwaal “Hal Lindsey and Biblical Prophecy” Premier
- O.Palmer Robertson “The Israel of God — Yesterday, Today and Tomorrow—”, P & R
- カール・バルト著作集(7)政治・社会問題論文集(1975年)

9 ■ **さらなる神学的思索のための****文献紹介: 中間派系、他**

- M.J.エリクソン『キリスト教神学』第四巻、いのちのことば社—「第12部 最後の事柄—第56章 終末論への序論」 pp230-238, 364-368
- Stanley J. Grenz “The Millennial Maze”, IVP, pp.209-215
- Clarence B. Bass “Backgrounds to Dispensationalism” WIPF and STOCK,
- Wayne Grudem “Systematic Theology” pp.859-863「教会とイスラエル」安黒訳
- G.E.Ladd “The Last Things” Eerdmans, 安黒訳
- R.G.Clouse “The Meaning of Millennium — Four Views—” IVP, 'Historic Premillennialism'
- G.E.Ladd
- G.E.ラッド『神の国の福音』
- ゲルハルド・ヴォス『神の国と教会』
- ウルリッヒ・ヴィルケンス『EKKローマ人への手紙』

- ジョン・マーレー『ローマ信徒への手紙』
- 『ユダヤ人伝道－教会への召命－』誰もが知りたいローザンヌ宣教シリーズ No.60 関西ミッション・リサーチ・センター

10 ■ さらなる神学的思索のための
文献紹介: ディスペンセーション関係

- ルイス・スペリー・シェイファー著、ジョン・F・ウォルヴォード改訂『聖書の主要教理』
- 改訂ディスペンセーション関係
- Charles C. Ryrie "Dispensationalism-Revised and Expanded"
- Fruchtenbaum "Israelology - The Missing Link in Systematic Theology -", "The Footsteps of the Messiah"
- 漸進的ディスペンセーション主義
- John S. Feinberg, ed "Continuity and Discontinuity - Perspectives on the Relationship between the Old and New Testaments -" Crossway
- Robert L. Saucy "The Case for Progressive Dispensationalism - The Interface between Dispensational & Non-Dispensational Theology -", Zondervan
- その他
- H. W. Bateman IV, ed "Three Central Issues in Contemporary Dispensationalism - A Comparison of Traditional and Progressive Views -"
- ハル・リンゼイ『地球最後の日』いのちのことば社

11 ■ さらなる神学的思索のための
文献紹介: 安黒作成DVD講義資料リスト

- 2010/3/31 関西聖書学院卒業論文 仲井隆典神学生『ディスペンセーション主義終末論の克服』－携挙について、再臨のあり方、イスラエルと教会、患難について、千年期について、の五つの項目に関し、「ディスペンセーション主義の主張」を、「エリクソン・ラッド・グルーデム・マーレー・岡山等の福音主義のすぐれた神学者の見解」を引用し、的確に論破した大変すぐれた論文。神学生論文であるが、古典的、また修正ディスペンセーションの誤った教えから脱却を求めるすべてのクリスチャンにおすすめしたい。このテーマで、神学的一里塚を形成している画期的な論文である。ブックレット: 31ページ 白黒、簡易製本、500円、送料別100円 (ICIで、実費にて委託販売中！)
- 2009/10/06: 日本福音教会: 牧師会研修: 安黒務: ディスペンセーション問題三部作 ③: 「ディスペンセーション主義聖書解釈」の問題: 基調講演と質疑応答 DVD [90分×1枚] = 1500円
- 2009/09/15, 25: 関西聖書学院: 関西聖書学院特別講義: 安黒務: ディスペンセーション問題三部作 ②: 「黙示録特別講義: イスラエルと教会」DVD講義録 [90X2枚] = 3000円
- 2009/06/24 関西聖書学院 関西聖書学院特別講義: 安黒務: ディスペンセーション問題三部作 ①: 「終末論: 千年王国と大患難諸説」特別講義: 主要資料: 岡山英雄著『患難期と教会』DVD講義録 [90X2枚] = 3000円
- 2006/04/27: 関西聖書学院: 日本福音主義神学会西部部会春期神学研究会議: 安黒: 「千年王国」諸説とユダヤ人伝道の位置づけ: DVD [2枚] + 資料 = 2500円

- 1 ■ Advanced School of Theology 『福音主義終末論：再考』信徒セミナー
講義①②と③④の幕間：前半のまとめと後半への導入として

世の終わりと教会の靈性
— 苦難と迫害を通して栄光に至るといふ靈性の道筋 —

〒671-4135 兵庫県宍粟市一宮町安黒332
一宮基督教研究所
安黒 務
<http://www.aguro.jp>
aguro@mth.biglobe.ne.jp

- 2 ■ 岡山英雄著『小羊の王国』より

第二次大戦中、軍による政治的支配は、国家神道に基づく天皇崇拜と深く結びついていた。独裁者は、祭神として宗教的権威を持ち、熱狂的な民族主義と結びついて、破局へと国民を駆り立てたのである。当時、日本の教会は、黙示録13章の、二匹の獣の意味を理解することができず、「獣」の礼拝と「小羊」の礼拝を同時に行い、ついに証人としての力を失った。

- 3 ■ 岡山英雄『患難期と教会』より

①世の終りにおける「患難期」の重要性

1. 千年期と患難期
2. 進歩主義的歴史観
3. 千年期後再臨説
4. デスペンセーションリズム
5. 患難期後再臨説

- 4 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

1. 千年期と患難期

1. 「千年王国」の解釈が議論の焦点
2. もうひとつの、おそらくより重要な側面の考察
3. 「患難期」の問題
4. 黙示録「42ヶ月」(11:2, 13:5)、「1260日」(11:3, 12:6)、「ひと時とふた時と半年の間」(12:14)
5. 一年を360日とするなら、「三年半」という同じ長さ
6. ダニエル書の「ひと時とふた時と半時」(7:25, 12:7)との関連から、終末における神の民の苦難を象徴
7. キリストの来臨に先立つ神の民の苦難の時
8. 11章から13章の記述にとどまらず、17章から18章の大バビロンの物語、また6章、8章から9章、16章の封印・ラツパ・鉢の三つの災いとも結びついて、4章から18章全体
9. 「三年半」はまた、最終的審判に先立つ、三つの災いの部分的審判を通して、神が人間に警告を与える時であり、前触れとしての裁きによって、人々が悔い改め、神に立ち返る機会を与える時

- 5 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

2. 進歩主義的歴史観

1. 楽観的、「進歩主義的」な歴史観
2. 四世紀まで教会は、小さく弱く、迫害される存在
3. すでに患難の中にあり、やがてより大きな患難の来ることを知りつつ、殉教をも恐れず証言
4. 現実の悪の力を完全に打ち破るキリストの来臨は、切なる願い

5. コンスタンティヌス帝のキリスト教公認、さらに国教化
6. キリストの来臨への切実な待望は失われ、地上の患難期は実際的な意味を持たなくなった。
7. カトリック教会の成立と発展にともない、「公認」の見解
8. 宗教改革においても、ルターやカルヴァンも終末論に関しては、中世の基本的な枠組みをほぼ踏襲
9. 「文明化」という植民地支配的な宣教論
10. 科学の発達にともなう「技術的ユートピア」

6 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

3. 千年期後再臨説

1. 教会の黄金時代、地上の「千年王国」の後に、キリストが来臨
2. 終末的患難に関する預言のほとんどは、70年のエルサレム崩壊で成就
3. オリーブ山でのイエスの「苦難の日」についての預言、パウロの「困難な時代」についての警告(Ⅱテモテ3章)、黙示録の「獣の国」との戦いへの備えを無視したもの
4. 患難期における教会のあり方を研究することは、教会とは何か、世界とは何か、歴史とは何かを問うこと
5. 表面的な事象に目を奪われることなく、それを動かしているものの実体を見極め、その奥に潜む闇の力と戦いつつ、なおそれを超えた勝利と希望に生きる

7 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

4. ディスペンセーションナリズム

1. 患難期についての詳しい研究はディスペンセーションナリズムの神学者たち
2. 19世紀半ば、イギリスのJ.ダービィら
3. 20世紀にアメリカでファンダメンタリズム運動と結びついて急速に広まった
4. 預言の研究に力を注ぎ、聖書の歴史性を強調し、終末への関心と呼び起こしたという点では大きな意義
5. ひとつの根本的な問題をはらんでいる
6. 「患難期前携挙説」
7. 教会とイスラエルを峻別して、患難期に、教会は携挙されて天にあり、イスラエルは地上に残される
8. 単なるカレンダー的興味から、世界歴史のこれからの動向を予測
9. 天に挙げられた教会にとって、地上の患難期は本質的に無関係
10. 患難期と教会の関係、とくに苦難の中にある教会のあり方についての分析が全く欠落

8 ■ ①世の終りにおける「患難期」の重要性

5. 患難期後再臨説

1. 患難期前携挙説が釈義的に成り立ち得ないーラッドとワルブードの1950年代の論争
2. 教会史においてきわめて歴史の浅い特殊な説ー18世紀に至るまで、このような終末論は存在しなかった
3. 近年、この説には大きな変化があり、「漸進的ディスペンセーションナリズム」と呼ばれる説をとる者たちは患難期前携挙を不可欠のものとは考えない
4. 黙示録の記述のほとんどは、患難期にかかわるー患難の時代における神の民のあり方、警告と励まし、戦いと勝利
5. 黙示録4:1で教会は携挙され、4章以下は地上に残されたイスラエルのためのものであるとするが[ワルブード]、現代の主要な注解者で、このような解釈を支持する者はいない。
6. マタイ24:1-31は、反キリストの出現、患難期、続いて再臨という終末的順序
7. Ⅱテサロニケ2:1-12によれば、教会は、反キリスト(不法の人、滅びの子)の支配する患難期を通して再臨の主に会う
8. 患難は教会にとって避けるべきものではなく、教会の地上における本質的なあり方
9. 神の民は「多くの苦しみを経て」使徒14:22、苦難によって練られ、清められ、純化されて(詩篇66:10,ダニ11:35、セカリヤ13:9、マラキ3:2,3)、神の国に入り、再臨の主に会う。

- 9 ■ 岡山英雄『患難期と教会』より
 ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」
1. 神の民と迫害
 2. 神の民の保護
 3. 神の民の証言
- 10 ■ ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」
 1. 神の民と迫害
1. 「三年半」とはどのような期間
 2. 神の民の迫害—「聖なる都」が異邦人によって踏みにじられる時—「海から上ってくる獣」が活動し、全世界を支配する(13:7)時
 3. 四つのシンボル、「竜」(12章)、「海の獣」(13章)、「地の獣」(13章)、「大淫婦」(17-18章)—悪の諸力を統括する「悪魔」は「大きな赤い竜」
 4. 「海から上ってくる獣」—政治的権力、軍事力による支配
 5. 「地から上ってくる獣」—宗教的権威による支配
 6. 「大淫婦」—経済的な繁栄と道徳的頹廢
- 11 ■ ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」
 2. 神の民の保護
1. 神の民は完全に守られる
 2. 「42ヶ月」の間、踏みにじられる
 3. 「神の聖所と祭壇、そこで礼拝している者」は、測りざおによって測られ、守られる(11:1)
 4. 「女の産む「男の子」(キリスト)が、彼を食い尽くそうとする「竜」から守られ神の御座に引き上げられた
 5. 「女」(教会)もまた、激しく追い迫る「竜」から逃れ、大鷲の翼を与えられ、荒野へ飛んでゆき(12:14)、「神によって備えられた場所」で「1260日」の間(12:6)、「ひと時とふた時と半時の間」(12:14)、かくまわれ、養われる
 6. 神の守りは、迫害の中でも完全
- 12 ■ ②世の終りにおける「患難期」と「神の民の靈性」
 3. 神の民の証言
1. 積極的に困難の中でも証言を続ける期間
 2. 「ふたりの証人」の幻—「1260日」の間、「二本のオリーブの木」、「二つの燭台」—全地の主の御前で預言(11:3-4)
 3. 証言のために、火によって敵を滅ぼし、天を閉じ、水を血に変え、災害によって地を打つ力
 4. 「死に至るまでもいのちを惜しむことなく」、小羊の血と自分たちの「証言のこぼ」のゆえに「竜」に打ち勝つ(12:11)
 5. 彼らは屈することなく、「竜」の手先である「大バビロン」の迫害の中でも、「イエスの証人」(17:6)として生涯を全うする
- 13 ■ 岡山英雄『患難期と教会』より
 ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか
1. 「三年半」の過去性
 2. 「三年半」の未来性
 3. 「三年半」の現在性
 4. 苦難から栄光へ
- 14 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか
1. 「三年半」の過去性
 1. 「三年半」とはいつのことなのだろうか
 2. 「三年半」は過去、現在、未来のそれぞれに深く関わっている

3. このような「時」に関する理解こそが、黙示録の解釈、また聖書の核心
 4. まず「三年半」は、過去のな性格
 5. 執筆された一世紀末—ローマ皇帝ドミティアヌス帝による迫害—「イエスにある苦難」(1:9)
 6. 「サタンの会衆」によって「ののしられていた」(2:9, 3:9)
 7. 海の獣、地の獣、大バビロンが、一世紀のローマ帝国の政治的、宗教的、経済的側面を象徴
 8. 一世紀末、教会はすでに苦難の「三年半」の中にあつた
 9. 患難の中にある同時代のキリスト者を慰め励ますために書かれた
- 15 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか
2. 「三年半」の未来性
 1. 未来の苦難をも意味する
 2. 終末において神の民を迫害する悪のカー「反キリスト」(I ヨハネ2:18)「荒らす憎むべき者」(マタイ 24:15)「不法の人、滅びの子」(II テサ2:3)「海からの獣」(黙13:1)
 3. 来臨直前に現れる巨大な悪の力
 4. 黙示録17章「獣」は「今はいない」、そして「やがて」底知れぬところから上って来る(17:8)
 5. この「獣」は「竜」や「にせ預言者」とともに、全世界の王たちをハルマゲドンの戦いのために集める(16:12-16)
 6. キリストの来臨に先立つ、未来的、終末的な戦い
 7. 未来の来臨直前の全世界的な迫害の時代
- 16 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか
3. 「三年半」の現在性
 1. 現在性を持つ
 2. 一世紀や、来臨直前に限定されることなく、教会の全歴史を貫いて普遍的
 3. 二千年近いキリスト教史と関連づけるなら一象徴的な期間
 4. 「ふたりの証人」—「二つの燭台」—「燭台」は「教会」である(1:20)—教会論的な理解がふさわしい
 5. 地上に立てられた神の教会が、「世の光」として証言を続ける働きの全体—あらゆる時代の、教会の証人としての役割に関係
 6. 未来の大きな患難が、現在の苦難と質的に連続している
 7. 全時代の教会の受けている苦難と、質的には連続
 8. 来臨の前に、それまでは局地的であった迫害が、全世界的な規模に拡大
- 17 ■ ③世の終りにおける「患難期」とはいつなのか
4. 苦難から栄光へ
 1. 黙示録の終末論、いや聖書の終末論の核心
 2. 患難期における教会のあり方への深い洞察に基づいた励まし
 3. 神の保護は完全であり、証言を続けて、殉教をも恐れることはない
 4. 混在しつつ成長し続けていた「麦」と「毒麦」(マタイ13:30)—それぞれの本質的な特徴をあらわに
 5. 神の国と獣の国が鋭くせめぎあい—その究極の姿を明らかに
 6. 地上の民は、神の国の民と獣の民とに二分されてゆく
 7. 獣の民は、大バビロンの不品行の「黄金の杯」(黙17:4)から飲み、「獣の刻印」(黙13:16)を受ける
 8. 神の民は、キリストの血による「新しい契約の杯」(I コリント11:25)から飲み、生ける「神の名」(黙3:12, 22:4)を額に記される
 9. イエスが十字架の苦難を経て、復活の栄光を受け、天に着座されたように、キリストの教会も、地上の患難を通して、栄光に輝く天のエルサレムの門をくぐる
 10. やがてキリストの来臨によって闇の力は完全に滅ぼされ、すべてが新しくされ、神の栄光のみが輝きわたる
- 18 ■ 安黒務「比較宗教学(宗教の神学)」講義より
- ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の霊性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

1. 十戒と日本キリスト教史
2. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性と北イスラエル王国ヤロブアムの罪
3. まとめ—苦難と迫害を通して栄光に至るといふ靈性の道筋

19 ■ ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の靈性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

1. 十戒と日本キリスト教史

1. 「あなたには、わたしのほかにほかの神々があってはならない。」モーセの十戒の第一戒
2. これほどまでの災難に見舞われながらもなお神の民を「奴隷の状態」に縛り付けておこうとする「エジプトの国」の恐るべき執着
3. 第一期「キリシタン」の時代(1549-1867)
4. 第二期「国家神道と教育勅語」の時代(1868-1945)
 1. ①天皇制を幹とし、キリスト教を枝とする「伝統主義」タイプ、②天皇制とキリスト教を楕円の二つの中心にして共存させる「共存」タイプ: A. 天皇制肯定型「共存」タイプとB. 天皇制否定型「共存」タイプ、③天皇制とキリスト教を対立するものとする「対決」タイプの三タイプ四種類
 2. 天皇制肯定型「共存」タイプのクリスチャンは、戦争中に強要された神社礼拝、宮城遥拝、御真影(天皇や皇后の写真)や神棚への拝礼に対しても、それらは「信仰の事柄」ではなく「愛国心の事柄」として従った人々です。…その人々は「形では神社や御真影に拝礼し、心の中では神に祈った。…何の矛盾も感じなかった。」という回答を寄せています。国家は巧妙なかたちで国体(国のアイデンティティ)への従属をせまり、多くのクリスチャンが妥協に追い込まれました。国家神道教育と時代の風潮の恐ろしさ
5. 第三期「平和憲法と教育基本法」の時代(1945-2006)
 1. 改訂教育基本法的美辞麗句の裏に「パロとその家臣たちは民についての考えを変えて言った。『われわれはいったい何と何をしたのだ。イスラエルを去らせてしまい、われわれに任せさせないとは。』」(出14:5)というクリスチャンに対する仕掛け

20 ■ ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の靈性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

2. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性と北イスラエル王国ヤロブアムの罪

1. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性
 1. 日本の政治と教育における右傾化の流れ
 2. 政治の原点—二つのキーワード: 『憲法』、『教育基本法』
 3. 自分の国の歴史、伝統、文化に誇りが持てない教育は、国の存亡を危うくする
 4. 元号法制化運動、…国旗国歌法の制定
 5. 『天皇を中心とした神の国』こそ、日本の政治の根幹
 6. 天皇家の宗教である皇室神道、天皇家の祭祀
2. 大和朝廷以来の天皇制のもつ宗教性と北イスラエル王国ヤロブアムの罪
 1. 北イスラエル王国が建国以来内包した偶像礼拝との類似性
 2. 子牛はユダからのイスラエル独立の象徴
 3. ヤロブアムは子牛礼拝を北王国の民の心に深く植えつけたので、王国が滅亡するまでこれはついにぬぐい去ることができず、北王国の王十九名はみな金の子牛礼拝に従いました。
 4. 日本の多くの政治家、教育界指導者にとって「日本のアイデンティティの中核」
 5. 「大和朝廷による統一国家の成立、つまり建国以来日本の神々を祀る司祭者としての天皇、現人神としての天皇の宗教的権威」に置かれている

21 ■ ④聖書と黙示録の「世の終りと教会の靈性」へのメッセージを日本の教会史にあてはめる

3. 苦難と迫害を通して栄光に至るといふ靈性の道筋

日本福音主義神学会全国研究会議で神戸改革派神学校校長の牧田吉和師は、その講演「三位一体論的・終末論的・神の国的靈性の展開」の中の「対国家との関係における神の民の靈性」:「キリストのみを唯一の王と告白し、キリストの王的支配の下に生きようとする時(聖靈に導かれて生きる者は必ずそのように生きる者である!)、最大の脅威となりうるのは国家的脅威であることは歴史が証明してい

る。すなわち、国家的権威が悪魔的な力を帯び始める時、キリスト教的靈性はあらゆる点で危機にさらされるからである。あらゆる領域において悪魔的な力に脅かされるのである。この問題は、日本の教会が歴史的に経験し、今も現実に置かれている状況を考える時、どれほど真剣な問題であるかが容易に理解できるはずである。ヨハネの黙示録を靈性の観点から読むならば、少なくともこの点はずすことはできないはずである。この問題を考慮する時、苦難と迫害を通して栄光に至るという靈性の道筋は最も鋭い意味合いを持ってくることになる。今一度指摘しておくが、この問題を考慮しない靈性理解は、特に日本の教会を念頭に置く時、致命的な欠陥を持つものとなるであろう。」

22 ■ **さらなる神学的思索のための
文献紹介、そしてICI資料**

- 岡山英雄『小羊の王国』
- 岡山英雄「患難期と教会」
- 稲垣久和著『大嘗祭とキリスト者』
- 牧田吉和師講演「三位一体論的・終末論的・神の国的靈性の展開」―「対国家との関係における神の民の靈性」
- 2012/02/29 日本福音教会月刊誌連載論稿 安黒務『ローザンヌ誓約と日の丸・君が代・天皇制問題』A. 日の丸・君が代問題の歴史：①戦前まで、②戦後、③逆コースと呼ばれる政治の反動、B. 日の丸・君が代問題の裁判：①判決への視点、②維新の会への抗議文、③聖書の解釈と適用、④憲法の解釈と適用、C. 藤林長官の見識：①国家と宗教、②目的効果基準、③解釈改憲、④政教分離、⑤神道指令、⑥政教の癒着、⑦目的・効果基準、⑧祭祀、⑨人権の蹂躪 三月号にて半年間にわたる「日本福音教会月刊誌」への『ローザンヌ誓約と日の丸・君が代・天皇制問題』連載 500円
- 2011/06/01 関西聖書学院 安黒務『日の丸・君が代』起立斉唱条例と処罰条例問題を神学的に思索する道筋の検討:特別講義DVD, 2000円→特別価格1000円[レジュメ、送料込]
- 2009/01-06 日本福音教会月刊誌連載記事 安黒: 2009年度“*What JEC?*”:使徒信条とJEC信仰告白にみるエリクソン神学: ブックレット 500円
- 2006/4-2009/1: 生駒聖書学院: 生駒聖書学院講義: 安黒: 宗教の神学:講義録: DVD[811分]+資料= 定価 13500円
- 2007/01-06: 日本福音教会月刊誌連載記事: 安黒: “*How JEC?*”:「十戒」シリーズ: ブックレット 500円
- 2007/07/03: 西宮福音教会: 日本福音教会牧師会研修会: 吉野・安黒: 「憲法改訂問題とJEC」DVD[1枚]+資料=2500円

- 1 ■ **Advanced School of Theology 集中講座**
『福音主義終末論:再考』
講義③ 21世紀の終末論の諸課題 I
 課題:旧新約聖書の①黙示文学と呼ばれるジャンルの聖書解釈の原則を学び、②再臨、空中携挙、③最後の審判を巡る諸説を比較検討する。
- 2 ■ **①黙示文学における聖書解釈の原則**
A. 黙示としてのヨハネの黙示録★
 1. 旧約預言とユダヤ教黙示について
 2. ‘黙示’文学の定義
 3. ユダヤ教黙示とヨハネの黙示の対象範囲
 4. 預言的黙示ないし、黙示的預言として
 5. 世界を見下ろす超越的な展望の開示
 6. 異なる視点からこの世界を眺める
 7. 幻の開示という黙示的伝統
- 3 ■ **①黙示文学における聖書解釈の原則**
B. イメージ表現を理解する★
 8. 異常なほど溢れ返る視覚的イメージ表現
 9. 想像の中で象徴世界に誘う喚起力
 10. 旧約の暗示、当時の世界の神話的イメージも
 11. 神学的な意味と応答を、喚起する力を求めて
 12. 罪に満ちた世界に降りかかる神の審判の意味
 13. 悪が神の審判によって滅ぼされる
 14. その豊かな意味を限られた紙面に凝縮
- 4 ■ **②「再臨と携挙」諸説比較:**
エリクソン著『キリスト教神学』58章 第一節 再臨
- 1) 1. その出来事の実在性
 1. 多くの聖書箇所—イエスご自身も
 2. 待望、しかし実際には起こらなかった?
 3. 使徒的ケリュグマーパウロ、ヤコブ、ペテロ、ヨハネ
 2. その日時の不明瞭さ
 ● その時は明示されず—イエス、天使、弟子たちも知らず
 3. 来臨の特徴
 1. 人格的に
 2. 肉体をともなって
 3. 目に見えるかたちで
 4. 予期せぬかたちで
 5. 勝利と栄光のうちに
- 2) 4. 再臨の統一性
 1. 再臨は二段階で起こるのか?
 2. 携挙は秘密裏に起こるのか?
 3. 再臨は一段階である
 4. 再臨描写における三つの語彙
 5. 用語の区別は支持されていない
 6. 秘密裏ではなく、公けの再臨
 7. アポカリプシスにおいて栄誉受ける

8. 用語の互換性は単一の出来事を示す
5. 再臨の急迫性
 1. まず成就必要な幾つかの預言があるのか？
 1. 大患難前再臨説—いかなる瞬間にも
 2. いつ起こるか知らない
 3. 主は近い、ゆえに熱心に待つべき
 4. 祝福された望み
 2. 上記の説の詳細な吟味→十分な説得力なし
 3. ある出来事の生起を許容する遅延

5 ■ ②「再臨と携挙」諸説比較:

A. 携挙について

- 1 デispensーション主義
- 2 ●教会は、キリストの秘密の空中再臨のときに携挙される。
 - 支持聖句とその解釈
 - Iテサ5:9 神は、私たちが御怒りに会うようにお定めになったのではなく、主イエス・キリストにあって救いを得るようにお定めになったからです。
 - Iテサ 4:17 次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会う(アパントス)のです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。
 - 患難に会うことなく携挙される
- 3 福音主義
- 4 ●教会は、空中・地上一体の再臨のときにキリストに会うために引き上げられる。
 - D主義解釈の分析・評価
 - 患難の只中で守られる
 - 会う “アパントス” は、出迎えて一緒に戻る。空中で会い、ただちに地上に戻る

6 ■ ②「再臨と携挙」諸説比較:

B. 再臨のあり方

- 1 デispensーション主義
- 2 ●キリストは秘密裏に空中に再臨され、教会を引き上げられる。その後、大患難が終わった時に地上に再臨される。キリストの再臨は、「空中再臨」と「地上再臨」の二回である。
 - 支持聖句とその解釈
 - Mat24:27 人の子の来るのは、いなく東から出て、西にひらめくように、ちょうどそのように来る(パルーシア)のです。
 - Mat24:30 そのとき、人の子のしるしが天に現れます。すると、地上のあらゆる種族は、悲しみながら、人の子が大能と輝かしい栄光を帯びて天の雲に乗って来るのを見るのです。
 - パルーシアは携挙、アポカリュプシス、エピファネイアは地上再臨
- 3 福音主義
- 4 ●キリストの再臨は、空中・地上一体の再臨一回のみである。
 - D主義解釈の分析・評価
 - 2Th2:8 その時になると、不法の人が現れますが、主は御口の息をもって彼を殺し、来臨(パルーシア)の輝きをもって滅ぼしてしまわれます。
 - 不法の人が滅ぼされるのは地上再臨のときである。
 - 1Pe1:7 あなたがたの信仰の試練は、火で精錬されつつなお朽ちて行く金よりも尊く、イエス・キリストの現れ(アポカリュプシス)のときに称賛と栄光と栄誉になることがわかります。
 - アポカリュプシスのときに栄光と栄誉を受ける。
 - Tit2:13 祝福された望み、すなわち、大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現れ(エピファネイア)を待ち望むようにと教えたとしたからです。

- 教会が待ち望む祝福された望みは、エピファネイアである。
- 以上の結果として、三つの用語は交換可能な用語であり、空中・地上一体の単一の再臨

7 ■ ②「再臨と携挙」諸説比較:

C. イスラエルと教会

1 デイスペンセーション主義

- 2 1. イスラエルと教会は、別個の実体である(神様はイスラエルを選ばれ、神の民として無条件契約を結ばれ、特別に祝福を注がれた。この約束は、イスラエル民族固有のものであり、教会(クリスチャン)において成就するものではない。神はイスラエルに対する特別な扱いを中断しておられるが、未来のある時点で必ずイスラエルは回復する。イスラエルに関してまだ成就していない預言は、イスラエル民族に成就されるのであって、教会において成就するのではない)

2. 教会は、イスラエルの取り扱いについての神の全般的なご計画の中の挿入である。

○旧約聖書の光の下に、新約聖書を再解釈している。新約聖書本来の意味を、旧約的視点で歪めている。

3 福音主義

- 4 1. 旧約のイスラエルの民と新約の教会(クリスチャン)は同質である。(民族としてのイスラエルではなく、真のイスラエルと、クリスチャンは神様に対する信仰において同質であり、この流れは旧約・新約を通して一貫している。)
2. 旧約のイスラエルと新約の教会に対する神様の取り扱いに違いはなく、神の民という点において同一である。

○旧約聖書をイエス・キリストのみわざを中心にして再解釈した結果が新約聖書である。旧約聖書の中に、“重ね絵、”のようにして啓示されている意味を抽出している新約の聖書解釈の原則に忠実である。

8 ■ ②「再臨と携挙」諸説比較:まとめ

1. G.E.ラッド(フラー神学校新約聖書神学教授): 旧約預言は、新約をもとに解釈されるべきである。
2. W.グルーデム(トリニティ神学校組織神学教授): イスラエルと教会は同質である。
3. J.マーレー(ウエストミンスター神学校組織神学教授): 民族的イスラエルは、真のイスラエルではない。

9 ■ ③最後の審判を巡る諸説の比較検討

エリクソン著『キリスト教神学』58章 第三節 最後の審判

○再臨は、大いなる最後の審判において起こります。

1. 未来の出来事
 1. 未来において
 2. 再臨の後に
2. 審判者イエス・キリスト
 1. すべての裁き一御子に委ねられている
 2. 信者一その裁きに参与する
3. 審判の対象
 1. 全人類が裁かれます
 2. 悪しき天使も裁かれます
4. 審判の基盤
 1. 地上の生活の観点から裁かれます
 2. 基準一神の啓示された御心
5. 審判の最終性
 1. その裁き一永遠であり、取り消せない

10 ■ ③最後の審判を巡る諸説の比較検討

エリクソン著『キリスト教神学』60章 最後の状態

- 1 1. 義なる者の最後の状態

1. 「天国」という用語
 1. 宇宙論的
 2. 「神」と同義語
 3. 神の「住所」
 2. 天国の性質
 1. 基本的な性質－「神の臨在」
 2. 顔と顔を合わせて－「完全に知る」
 3. すべての悪の除去
 4. 大いなる栄光の場所
 3. 天国における私たちの生活：安息、礼拝、奉仕
 1. 安息
 2. 礼拝
 3. 奉仕
 4. 交わり
 4. 天国に関する問題
 1. 場所なのか、状態なのか？
 2. 肉体における満足－飲食・性行為？
 3. 完成の問題－欲求不満・退屈？
 4. 記憶の問題－知人・罪深い行為？
 5. 報酬には等級がある？
 6. 同じ環境－主観的知覚・鑑賞眼の差
2. 悪しき者の最後の状態
- 序
- 時代遅れ・副次的な教え？、幾つかのイメージ、神の不在・臨在からの追放
1. 未来の裁きの最終性
 1. 「普遍救済主義」の概念に直面
 2. 救いは普遍的？－矛盾する聖書箇所
 3. 普遍的箇所と制限的箇所の関係
 4. 普遍的影響の並行描写－「すべて」と「多く」
 5. 「有効性」と「受益者」
 6. セカンド・チャンスの示唆－存在せず
 2. 未来の刑罰の永遠性
 1. やり直しは不可、かつ永遠もの
 2. 「絶滅主義」について
 3. 聖書の教えに矛盾している
 4. 永遠のいのち、永遠の刑罰－並行描写
 5. 愛に満ちた神と永遠の刑罰－調和できるのか？
 6. 罪を犯す－「無限の意思」との関係
 7. 「行為の結果」を永遠に経験する
 8. 「選択」の通りに「遺棄」される
 3. 刑罰の程度
 - 刑罰に等級あり
 - 等級の差－主観的理解・認識程度に釣り合う
3. 最後の状態の教理の意味
 2. 地上における決断－永遠の状態を決定
 3. つかの間の生涯－永遠との対比

4. 地上での喜び—はるかに超越する天国
5. 地上の喜びの増幅以上—主とともにある信者
6. 地獄—肉体の苦しみよりも—主との完全かつ最終的な分離
7. 懲罰というより—罪深い生涯の自然な結果
8. 報酬と刑罰—等級がある

11 ■ ③最後の審判を巡る諸説の比較検討
宇田進著『総説現代福音主義神学』等

- 1 永遠の刑罰の教理の動向
- 2 1. 嵐の中の永遠の刑罰の教理
 - 愛なる神との矛盾
2. 絶滅説と福音派
 - 滅び→存在の消滅
3. バルトのユニヴァーサルイズム
 - 棄却されたのは御子のみ
4. 全面的ユニヴァーサルイズム
 - 万物の更新と万人の回心
5. 多元主義的ユニヴァーサルイズム
 - 万人は死後に聖化、最終的に救いに
6. 第二バチカン公会議後
 - 神のみ知る方法にて救いの可能性提供
- 3 福音主義の永遠の刑罰の教理
- 4 ○最後の審判と刑罰
 1. ウェストミンスター信仰告白
 2. 最後の審判の永遠の刑罰観—聖書の教理・歴史の教会の共通の見解
 - 聖書の終末論への礎石
 1. 周囲の世界の思想傾向と生活感覚
 2. 基本点と全体の眺望
 - 福音主義的聖書観と福音主義的聖書解釈方法論
 - エリクソン著『キリスト教神学』
 - G.E.ラッド著『最後の事物』
 - 『終末の希望についての信仰の宣言』改革派60周年記念宣言

12 ■ さらなる神学的思索のための文献紹介、そしてICI資料

- M.J.エリクソン『キリスト教神学』第四巻、いのちのことば社—「第12部 最後の事柄—第58章 再臨とその結果」
- リチャード・ボウカム著『黙示録の神学』新教出版社
- 岡山英雄『小羊の王国』いのちのことば社
- G.E.Ladd "The Blessed Hope", "The Last Things"
- M.C.テニイ『ヨハネの黙示録』聖書図書刊行会
- 仲井隆典『ディスペンセーション主義終末論の克服』
- M.J.エリクソン『キリスト教神学』第四巻58章、60章
- T.H.C.フリーゼン『旧約聖書神学』日本基督教団出版局
- 日本キリスト改革派教会『創立六十周年記念宣言』「終末の希望についての信仰宣言」
- ウェストミンスター信仰告白：32章「人間の死後の状態について、また死人の復活について」、33章「最後の審判について」
- G.E.Ladd "A Commentary on the Revelation of John" Eerdmans
- Richard Bauckham "The Climax Prophecy—Studies on the Book of Revelation—" T.&T.

Clark…同じ著者が『黙示録の神学』で論じた諸相を大幅に発展させた論文が多数収められた論文集

- G.R.Beasley-Murray “The Book of Revelation” Marshall, Morgan & Scott…神学的問題にも注意を促す、信頼に足る注解書
- G.B.Caird “A Commentary on the Revelation of St John the Divine” A & C. Clark…ヨハネの黙示録を徹底的に旧約聖書のイメージや主題のキリスト教的解釈として読むことを試みた点で注目すべき註解書
- J.P.M.Sweet “Revelation” SCM Press…スウィートの解釈は、G.B.カイドやオースティン・ファラーの伝統にあり、旧約の暗示の意義とイメージ表現の連想の射程に著しく注意を促す、おそらく英語による最良の小注解書
- Paul S.Minear “Christian Hope and the Second Coming” Westminster
- M.J.Erickson “How shall they be saved? —the Destiny of those who not hear of Jesus—” Baker
- 2009/10/25: 一宮チャペル: 安黒務: ヨハネの黙示録講解説教シリーズ: — エリクソン・ラッド・岡山英雄の立場: 大患難期後携拳・歴史的千年王国前再臨説に立脚した — 黙示録 CDメッセージ全集: 合計19章(8.9.10章除く)×約20分÷60分×1000円=6330円: 解説資料ブックレット(40ページ)付き 500円: 合計 6830円

- 1 **Advanced School of Theology 集中講座**
『福音主義終末論:再考』
講義④ 21世紀の終末論の諸課題Ⅱ
 課題:教会内で特に議論されることの多いテーマである千年期と患難時代にまつわる諸説を並べ、英語文献の新しい知見を交えながら理解を深める。

- 2 **千年王国と大患難の諸説の検討**
 - 1 エリクソン著
 『キリスト教神学』59章
 - 2
 1. 千年王国諸説
 1. 後千年王国
 2. 前千年王国
 3. 無千年王国
 4. その問題の解決
 2. 大患難諸説
 1. 大患難前再臨説
 2. 大患難後再臨説
 3. 中間的立場
 4. その問題の解決
 - 3 仲井隆典論文
 『D主義終末論克服』
 - 4
 1. 患難期対照表
 2. 千年王国対照表

- 3 **1. 千年王国の見方**
 1. **後千年王国:楽観主義の見方**
 1. 福音宣教の成功裏のうちの進展
 2. 社会情勢への関与と進歩の時代
 3. 個人的回心より社会的変革が王国のしるし
 4. 未来より今ここにある現在の現実
 5. 文字通りの千年ではなく拡張された期間

- 4 **1. 千年王国の見方**
 2. **前千年王国:悲観主義の見方**
 - 1 歴史的な前千年王国説
 - 2
 1. 一千年の地上支配
 2. 千年至福説
 3. 19世紀中頃より流行
 4. 鍵句:黙20:4-6
 5. エゼサン二つの復活
 6. 大変動の出来事
 7. 世界大の平和
 8. 再臨前—最悪の状態
 - 3 デispensーション
 前千年王国説
 - 4
 1. デispensーション主義?

2. 聖書の文字通り解釈？
 3. 啓示の連続的段階？
 4. イスラエルと教会の相違？
- 5 ■ 1. 千年王国の見方
3. 無千年王国：現実主義的見方
 1. 再臨後、ただちに最後の審判
 2. 「一千年」は象徴的に
 3. 「後千年」と「無千年」一単純に区別されず
 4. 黙20章の扱い－黙示録全体を考慮に
 5. 黙示録は全体として「象徴的」
 6. 何を象徴－聖なる数「七」と「三」は結びつき完全数「十」、3乗されて全体的な完全の「千」
 7. 主要な解釈学的問題－「二つの復活」
 8. 第一の復活「霊的」、第二の復活「肉体的」－一貫性の欠如
 9. 預言－未来的・文字通りより、歴史的・象徴的に解釈
 10. 再臨のしるしに対する熱心な研究なされない
- 6 ■ 1. 千年王国の見方
4. その問題の解決
 1. より困難の少ない見方を見出す努力
 2. 福音宣教における楽観主義－不適切
 3. 再臨前に信仰が冷める
 4. 教理は単一の箇所に依拠すべきではない
 5. 前千年王国説－聖書により適合
 6. 時間的順序、二段階の復活－より適切
- 7 ■ 2. 大患難の見方
1. 大患難前再臨説
 1. 歴史上かつてないほどの大患難
 2. 教会の携挙－空中再臨
 3. 二つの再臨、三つの復活
 4. 患難から教会を解放すること
 5. 選民が患難の期間に存在する：マタイ24章
 6. 次の瞬間にも再臨が起こりうる
 7. 目を覚ましているように
 8. 次の出来事－再臨＝祝福された望み
- 8 ■ 2. 大患難の見方
2. 大患難後再臨説
 1. 再臨－大患難が終わるまで起こらない
 2. 最近の出来事を文字通りに解釈しない
 3. 「選民」という用語＝「信者」を意味
 4. 「神の怒り」と「大患難」との相違
 5. 患難は、世紀を通じて「教会の経験」
 6. 「エクフューゴー」＝その只中において守られる
 7. 「アパンテス」＝会い、伴ってパーティに歓迎する
 8. ひとつの再臨、二つの復活
 9. 大患難の只中で保護し、保たれるという確信
- 9 ■ 2. 大患難の見方

3. 中間的立場

- 多くの調停的立場
 1. 大患難中期再臨説
 2. 部分的携挙の立場
 3. 切迫した大患難後再臨説
- どれも多数の支持者得ていない

10 ■ 2. 大患難の見方

4. その問題の解決

1. 大患難前再臨説—不自然、聖書支持せず
 - 再臨の二段階、三つの復活、イスラエルと教会の鋭い分離に問題あり
2. 大患難後再臨説—より適切な解釈が可能
 - 選民が患難の中にあり、過酷さから保護
3. 聖書の全般的な趣旨—大患難後再臨説に適合
 - 災難に打ち勝つ力の約束
4. 大患難後再臨説の課題
 - 千年王国に関する神学的理由が相対的に困難に

11 ■ D主義終末論の克服の道筋： 患難について

- 1 デispensーション主義
- 2 ●教会は、大患難の前に引き上げられ、地上を襲う患難に会わない。
 - 支持聖句とその解釈
 - マタ 24:24 にせキリスト、にせ預言者たちが現れて、できれば選民をも惑わそうとして、大きなしるしや不思議なことをして見せます。
 - 「選民」を救われたイスラエル等と
 - Rev3:10 あなたが、わたしの忍耐について言ったことばを守ったから、わたしも、地上に住む者たちを試みるために、全世界に来ようとしている試練の時には、あなたを守ろう(テレオー)。
 - Rev4:1 その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。また、先にラツパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」
 - 教会は携挙され、黙示録の患難はイスラエルの民が対象
- 3 福音主義
- 4 ●教会は大患難の中でも守られ、保護される。
 - Mat24:22 もし、その日数が少なくされなかったら、ひとりとして救われる者はないでしょう。しかし、選ばれた者のために、その日数は少なくされます。
 - ペンテコステ以降、「選民」とは教会
 - Joh17:15 彼らをこの世から取り去ってくださる(アイロー)ようにというのではなく、悪い者から守ってくださる(テレオー)ようにお願いします。
 - 患難前に取り去られるのではなく、患難の只中で守られる
 - 神の民の苦難—旧新約の神の民の苦難、過去(一世紀)・現在・未来(終末)の苦難
 - エジプト、カナン、バビロンで、イエス、使徒、初代教会も、歴史上の教会、そして終末の教会も、患難は避けるべきものではなく、本質的なあり方、多くの苦しみを経て、苦難によって練られ、清められ純化されて、神の国に入り、再臨の主に会う

12 ■ D主義終末論の克服の道筋： 千年期について

- 1 デispensーション主義
- 2 ●千年期前再臨説をとるが、千年期はイスラエルにとっては特別な祝福の時である。
 - エレ30:3 見よ。その日が来る。——【主】の御告げ——その日、わたしは、わたしの民イスラエルとユダ

の繁栄を元どおりにすると、【主】は言う。わたしは彼らをその先祖たちに与えた地に帰らせる。彼らはそれを所有する。」

●エゼ39:25 それゆえ、神である主はこう仰せられる。今わたしはヤコブの繁栄を元どおりにし、イスラエルの全家をあわれむ。これは、わたしの聖なる名のための熱心による。

●千年王国はイスラエル民族中心である。

3 福音主義

4 ●千年王国は、キリストの支配が地上に及ぶ歴史的千年王国である。

●ヘブル 8:5 その人たちは、天にあるものの写しと影とに仕えているヘブル8:13 神が新しい契約と言われたときには、初めのを古いとされたのです。年を経て古びたものは、すぐに消えて行きます。

●ロマ11:23 彼らであっても、もし不信仰を続けなければ、つぎ合わされるのです。神は、彼らを再びつぎ合わすことができるのです。

●ロマ11:25 その奥義とは、イスラエル人の一部がかたくなになったのは異邦人の完成のなる時までであり、11:26 こうして、イスラエルはみな救われる、ということです。

●民族的イスラエルも救われる、しかしそれは教会と同じ信仰によるのであり、教会に接木される

●千年王国時代とイスラエルとの関係についての新約の言及はない、民族主義的視点は消え失せ、普遍主義的視点が明確である。

13 ■ さらなる神学的思索のための 文献紹介、そしてICI資料

●M.J.エリクソン『キリスト教神学』第四巻、いのちのことば社―「第12部 最後の事柄―第59章 千年期と患難時代についての諸見解」

●岡山英雄『小羊の王国』

●岡山英雄「患難期と教会」

●仲井隆典『デスペンセーション主義終末論の克服』

●G.E.Ladd“*The Last Things*”

●D.H.Kromminga “*Millennium in the Church*”, Eerdmans

●Stanley J.Grenz “*The Millennial Maze –Sorting out Evangelical Options–*”IVP

●2007/11/13: 日本福音教会本部事務所: 日本福音教会牧師会研修会: 安黒: 「セカンド・チャンス論」批判: DVD[1枚]+資料=2500円